

インド学の歴史・現状・未来

江島 恵教

近代的なインド学は他の古典領域の研究と同様に、Willam Jones(1746-94)、H.T. Colebrooke(1765-1837)等のヨーロッパの学者によって開始され、それが南条文雄(1847-1927)、高楠順次郎(1866-1945)等によってわが国に移入紹介され、それ以来日本では仏教学研究との関係もあって、急速な進歩を遂げてきた。

研究の対象となる「インド」という概念も、古来インドにおいては“*Arya-deZa, BhArata-varSa*”, 中国では“身毒, 賢豆, 天竺, 天竺, 印度”, ヨーロッパ世界では“*India<Indus, Sindhu*”, “*Hindu<Hendh, Hindhu*”等と称され、現代に至っている。

インド文化は“*Veda, UpaniSad, DharmaZastra, MahAbhArata, darZana, Brahmanism, Buddhism, Jainism, Hinduism*”等、多様な歴史的展開を経、いわゆるアーリヤ文化、ドラヴィダ文化、イスラム文化、ヒンドゥ文化などが重層的に織り交ざり、「多様なインド」と呼ばれるような状況を呈している。他方インドにおいては、つねに文化的伝統への固執と維持への努力がなされ、かつしばしば伝統の見なおしも行われているが、その中において個人のoriginalityをどの程度認めるかが問題とされる。また、仏教・ヒンドゥ教を中心としたインド文化がインド以外の、主に中央・東アジア・東南アジアに伝播され、それぞれの地域において、独自の展開を見せていることも、看過されてはならない。

したがって、インド文化を形成し、それを維持する根幹となった「古典」の研究は、インド内部における「原典」研究それ自体が「伝承と受容」の過程と密接に関係し、他地域との関連も考慮されながら、総合的に推進されなくてはならないのである。

現在「インド学」は、古代・中世インドの研究と近現代インドの研究が主流となり、その二者の間に乖離が認められる。しかも、「インド」を一つの統一された地域と見なして研究される場合が多く、現在は、例えば、南インドと西北インドといったように「インド」自体の内部をさらに分解して、研究する必要性が叫ばれつつある。この点は「古典」的テキストの研究の場合も、今後十分に留意されるべきである。

分解と総合、ミクロとマクロの視点を、つねに拮抗させながら、古典が研究されねばならないのである。

このことは、他領域の古典研究についても、同様に当てはまるであろう。

西洋古典学の歴史・現状・未来

内山 勝利

この領域における実質的な基礎作業は、すでに前3世紀のアレクサンドリアで、文法学・文献学として始められている。その伝統は、同地をはじめ、アテネ、ローマなどを中心として継承され、さらに古代世界終焉ののちは、ビュザンティオン(コンスタンティノポリス)に拠点を移して、ルネサンス期以降西欧に流入するまで、ほぼ途絶えることなく営まれてきた。

むろん、この間に逸失した古典著作は多く、また伝承にはキリスト教との軋轢や偶然の事情からさまざまなバイアスがかけられ、必ずしもすぐれた著作のみが選別されて今日に伝えられているとは限らないのが実情である。現存する古典著作は、おそらく90%以上がキリスト教修道院で羊皮紙に筆写された「中世写本」を経由しており、修道僧たちのニーズと選択が伝承を決めていると云ってよからう。とはいえ、比較的には確固とした伝統に支えられてきただけに、文献学的にはかなり質の高いテキストが、(しかもある意味では適度な量だけ)われわれの手にもたらされていることは、幸いとするに足りよう。

たとえばプラトンについてみれば、今日その「中世写本」なるものは、著作の一部のみを含むものまで数えれば、500は優に越えており、あるいは1000に達する見込みさえあるかと言われている。しかも、どの写本も比較的大過ないレベルで安定しており、おそらく、今後すべての写本が校合されたとしても、革命的なテキスト変更はまず起こりえないであろう。もっとも、見方を変えれば、今日のプラトン・テキストの質は、9世紀末に筆写されたA写本・B写本(これらは多分当初はセットになって一つの「プラトン全集」を構成していたものと考えられている)にもっぱら支えられているところが大きく、もしこれら二つの写本がかりうじて伝わるのがなかったとしたら、テキストは一挙に不安定なものになっていたかもしれない、とも思われる。事実、B写本の発見などは、ほとんど数奇な偶然が働いた結果に他ならな

い。こうした事情は、おそらくホメロスやギリシア悲劇、その外の著名な古典作品についても、ほぼ似たようなものかと思われる。

18世紀に始まる近代の古典文献学は、やや素朴な言い方をすれば、多数の写本の比較考証にたって、原典を正確に復元することを、第一の課題とした。そうした作業は、おそらく近代においてはじめて可能となったものであり、したがって、ある意味では、われわれは、少なくともアレクサンドリア時代以降では最良の古典テキストを手に行っていると言うことができるかもしれない。それまでの中世写本は、当然、いずれか一つの有力写本を忠実に書き移したものであった（あるいは、それが最善の写本であった）し、近世初期の活字印刷本にしても、たまたまそのとき入手できた、比較的できのいい中世写本を、ほとんどそのまま再現したものである。たとえばプラトンの標準版とされているステパヌス版でもそうで、どういう系統の写本であるかも、見当がついている。それに対して、今日われわれの手に行っている古典著作（少なくともその主要なもの）は、さきほどの「多数の写本の比較考証」を経て、テキストの変遷と成立事情への遡及を可能な限り試みたうえで、原典の復元を目指したものとなっている。その作業も、ここ200年来西欧において、きわめて活発に行われてきた。

したがって、西洋古典の領域においては、基礎的なテキストの校訂作業においては、ひとまずドラスティックな時代は終わり、いわば第二次レベルでの、なお残された著作の整備や、より精密な作業をすすめる段階に入っている、と言ってよかろう。ギリシアでも、ヘレニズム時代の作品については、たとえばガレノスのように、重要な思想家の膨大な著作を含めて、最近ようやく本格的な校訂がいくつか出始めたようなケースも少なくないし、また量的にギリシアに数倍するラテン著作の全テキストは、すそ野の方に至れば、なお未整備状態にあるものは、少なくないであろう。しかし、古典期の主要著作について見れば、ギリシア・ラテンを問わず、一応その「すべて」がCD ROM化されているのであるから、おそらく他のどの古典領域よりも恵まれた事情にあるように思われる。おおむねのところを言えば、いまインドや仏教関係の方々が登場しているような困難な、しかしやり甲斐のある段階は、アレクサンドリアやローマでの文学研究以来の伝統の中で、一応のりこえられている、と言っていいのではないだろうか。

むろん、その上でのより精緻な校訂の整備や、整備されたテキストを土台にした古典研究において、コンピューティングの活用余地は、なお限りなく広い。実際、その検索システムによって、網羅的なテキスト参照は、

きわめて容易になった。少なくとも機械的には。目下のところ、必ずしも飛躍的に目ざましい研究成果への寄与は、顕著ではないものの、その面での質的向上は疑いえないであろう。大部分の主要著作について、まずは完璧なインデックス、コンコーダンス、レクシコンなどが次々と作成されてもいる。

より具体的な成果の一例を挙げれば、プラトンの著作のクロノロジーに関する貢献がある。プラトンの30数篇の著作の執筆年代順については、実は19世紀後半に、きわめて鮮明な文体上の変化が注意され、文体統計法なるものが急速に確立されて、大筋のところは結果が出たのであるが、最近のコンピュータを利用した統計処理は、第二次・第三次レベルでの処理といった、わたしなどにはどうもフォローできない高度な計算過程が施されている。そして、ほぼ従来からの基本線を再確認するとともに、いくつかの点では、やや新たな問題提起的な結果を提示するものともなっている。最も注目された報告を一、二挙げておけば、

G. R. Ledger, *Re-counting Plato: A Computer Analysis of Plato's Style*, 1989.

L. Brandwood, *The Chronology of Plato's Dialogues*, 1990.

また、最近の日本の西洋古典学会での発表において、ボン（ドイツ）の古典学者グループの研究方法が援用されたケースがあり、一つ的话题を呼んだ。それは、プロペルティウス、ホラティウス、ウェルギリウスなどの大詩人の作品について、後世における挿入・改ざん部分の判定基準として、先行作家中に類似詩句を検索する方法で、もし該当するものが見つかれば、挿入・改ざんと判定する、というものである。むろん検索はコンピュータによって網羅的になされる（のであろう。もっとも、その手続などに関しては、「企業秘密」だという応答もあり、したがって、ここでの報告も正確を欠くところがあるかもしれないが、容赦されたい）。

さらに、特に歴史関係で最近の研究の大きな柱となっている碑文資料の扱い（Epigraphik）や各種の記録文書を活用した社会史的研究など（e.g. Prosopography）においては、今後おそらく資料の電子テキスト化や電算処理は、きわめて効果的な手段となりうるように思われる（が、これはあくまで外野席からの観測にすぎない）。その外、文書以外の考古学資料やイコノグラフィー的なものについては、「ペルセウス・プロジェクト」なるものが進行していて、あらゆる図版や写真資料がCD ROMのかたちで提供されており、分野によっては、研究・教育に不可欠のものとなっている。

しかし、やや印象的に付け加えれば、西洋古典領域における電算化は、全体としてはきわめて静かで堅実に、

いわば健全に進められている。ちなみに、現在ドイツでは *Thesaurus linguae Latinae* なるラテン語の最大規模の辞典造りが、数十年来延々とつづけられているが、その作業は完全に伝統的な人海作戦によっており、ようやく今日Pのところまで完了したが、当然このペースで、さらに数十年にわたってつづけられるはずである。(こういう仕事にしかるべき *raison d'être* が認められ、それを全世界の古典学界が支援している、ということは、きわめて大きな意味をもっているし、個人的にはいささかの安らぎを覚えずにはいられない。)

西洋古典学が日本に根づいたのは、およそ近百年のことで、特に組織的な規模で本格的に取り組みられるようになったのは、第二次大戦後のことである。日本西洋古典学会は昭和25年(1949)に第1回大会を開催しており、あたかも来年5月には、第50回の記念大会を予定しているところである。

この間、日本の西洋古典学は、組織的にも研究水準的にも、まず順調な進展をつづけてきた、と行うことができよう。人文学の場合、その成果が必ずしも一元的に国際平準化されることはできないようにも思われるが、事実として、国際学会などでの発表者数も、最近格段に増加しており、また世界的に注目されるような研究もかなりの数に達している。国内での成果について見ても、諸外国の成果を踏まえつつ、それらの批判的吟味に立って十分に拮抗したレベルでの独自の議論と目されうようなものが多々見いだされる、とも言ってよかろうと思われる。

他方で、一定の研究レベルの向上に伴って、これはある程度まで避けがたい趨勢であろうが、各研究領域ごとの専門分化が進行しつつあることは、西洋古典学というものを、一つの統一枠と見るかぎり、肯定的にはばかり評価することのできない事態である。日本西洋古典学会に即して言えば、ここは従来から哲学・史学・文学、そして美術史・考古学などという4つの分野の区別が大まかにおこなわれてきたが、最近ではそれぞれに固有の研究状況に対応して、各分野の特殊化が顕著になりつつある。哲学分野の議論はしばしば精緻なテキスト解釈ないし分析に立ち入らざるを得ず、その場合口頭発表を聞くというよりも完全なハンド・アウトを目で幾度も辿り直さなければフォローできない、ということになりがちである。また史学分野について言えば、ヘロドトスやツキジデスなどのおなじみの「古典」や政治史が正面から取り扱われることは、むしろ稀で、研究の中心は「社会史」的な局面に移行し、ここでも他分野の研究者には初めて目に触れるような碑文資料や、あまり精通するところのない法廷弁論などが、材料として扱った、きわめて精緻な内

容のものになってきている。

繰り返して言えば、むしろこれらは研究状況の進展と高水準化をも意味するものであり、それ自体は決して否定要因ではない。しかし、同時に学会全体としては、その統一性と分野間の融合と交流を維持ないし回復しようという努力が、最近やや意識的になされつつある。たとえば、統一テーマの下でのシンポジウムの開催などがすでに実施されており(第1回のテーマが「説得(ペイトー)」だったことは、ややアイロニカルにも響くだろうが)、今後そうした機運はさらに高まっていくものと思われる。

こうした趨勢は、しかし、単に研究上の専門分化から結果しているだけではなく、おそらくより巨視的な流れの中で見れば、古代ギリシア・ローマ世界が、一方的なヒューマニズムの理想であることをやめた時代にわれわれがいる、ということに起因しているであろう。われわれの研究の方向は、基本的に、古典世界をある生身の人間たちが展開した一つの歴史、一つの現実として対象化して捉えようとしている、と言ってよかろう。

古代ギリシアにおける「irrationalなもの」への着目は、今世紀を通じて次第に強調されてきたモチーフである。今世紀初頭におけるレヴィ=ブリュールやJ.ハリソンらの神話学・人類学と古典学の結合は、古代ギリシアをプリミティブな社会として位置づけた上でのものに他ならない。その行き方は一旦は批判の中に埋没したが、その後も、彼ら以上に文献内在的に「irrationalなもの」を探り当て、よりいっそう生身の現実としての古代世界を明らかにしようとする動向は、確実に古典研究の中に地歩を固めてきている。たとえば、ギリシア思想の宗教性を強調し、さらにその根底に古来の魔術的伝統の強固さを見て取ることが、むしろ目立った動きとなっている。e.g. Jaeger, W., *Theologie der fruhen griechischen Philosophie*, 1942.

Burkert, W., *Weisheit und Wissenschaft*, 1962.

Kingsley, P., *Ancient Philosophy, Mystery and Magic: Empedocles and Pythagorean Tradition*, 1995.

また、E. R. DoddsやG. E. R. Lloydらの研究は、ギリシア哲学や科学にも内在する、同様の傾向を明るみに出したものとして、従来のギリシア像の変更を要求するものとなっている。あるいは、K. Doverのホモセクシュアリティやポピュラー・モラルティについての研究なども、こうした趨勢の中でこそ出てきたものであろう。

Dodds, E. R., *The Greeks and the Irrational*, 1951.

Lloyd, G. E. R., *Polarity and Analogy: Two Types of Arguments in Early Greek Thought*, 1966.

Dover, K., *Greek Homosexuality*, 1978.

これらのいくつかの研究に言及したのは、けっして特殊なものとして列挙したわけではなく、まさに今日の西洋古典学の一般的動向をシンボリックに示すものであるからに他ならない。哲学における批判的・分析的扱いも、歴史における社会史的研究も、文学における精細な感情表現や技法の解明も、古代への視線の取り方としては、明らかに共通の基盤に立っている。

もっとも、古代ギリシア・ローマ像は、長い伝承の歴史の中で、たえず大きく揺れ動いてきている。また、いかなる時代のパースペクティブにおいても、大きな姿を現し、根源的な影響力を及ぼしうるものが古典の古典たる所以でもあるはずである。実際、19世紀以降においても、U. v. Wilamowitz-Moellendorfが *Altertumswissenschaft* すなわち「科学」としての古典学を唱えて一世を風靡すると、つづく時代には、さきほども名前が出た W. Jaeger や H. Fraenkel たちが「よりヒューマニスティックな」古典学へのリアクションを主張する、という具合に、ほとんど世代ごとに異なった古典像を求めてきた。現今の行き方もまた、おそらくそうした揺れ動きの幅の中での一つの局面と見なしうるであろう。それは、当然試みるに値する新たなギリシア・ローマとの関わり方であり、学的なレベルの高まりの中で、われわれはわれわれの古典像を捉えなおすことが、いわば必然的な要請となっているのである。さらに言えば、規範や典型からいったん開放された古代ギリシア・ローマ世界は、その直接的伝統から離れたところに位置するわれわれ日本人にとっては、きわめて関わりやすいものになっている、ということもできよう。

イスラエル学の歴史・現状・未来

関根 清三

イスラエル学という言い方は誤解の余地がありますので、その定義から始めたいと存じます。ここでいうイスラエル学とは、古代イスラエル宗教、およびそれを継承するユダヤ教、そしてユダヤ教の一発展形態である限りにおける初期キリスト教、を対象とする学問のことです。

このうち「ユダヤ教」は、エルサレム第一神殿が破壊

された紀元前6世紀のバビロン捕囚ないしそれからの帰還以降の「初期ユダヤ教」と、その後いったん再興された第二神殿も崩壊の憂き目を見た紀元後1世紀末以降の「後期ユダヤ教」とに分かれます。この後期ユダヤ教は神殿ではなくラビ会議が中心となったという意味で「ラビ的ユダヤ教」と呼ぶ場合もあります。これらのうち古代イスラエル宗教と初期ユダヤ教の生み出した古典が、ユダヤ教の謂ゆる聖書、キリスト教の謂う所の旧約聖書です。私・関根の専門は、この旧約聖書になります。また後期のラビ的ユダヤ教が生み出した古典がタルムードその他で、これを専門とされるのが、市川裕さんです。そして初期キリスト教の生み出した古典が新約聖書で、この専門家が佐藤研さんです。この三名が、イスラエル学分野の計画研究代表者ということになります。以下、お二人の専門領域については、お二人から教えていただいたことを私なりにまとめて、ご報告いたします。

さてイスラエル宗教の最も根本的な古典が、旧約聖書ですが、それがどのような過程を経て成立したかを解明し、いかなる意味を伝えているかを規定することが、旧約研究の基本となります。その中でも個々の文書の、遡源しうる限りの最古の姿の確認作業は本文批評と言われ、基盤的重要性を持ちます。その点で、死海写本が紀元前後の時代のヘブライ語写本を大量にもたらしたことは画期的であり、旧約本文の確定に大きく寄与しつつあります。

死海写本は、1947年以来、死海沿岸のクムラン洞穴から発見された写本群ですが、それまで知られていたマソラ本文が、紀元後10ないし11世紀のものでしたから、約千年古い読みを伝えているという意味で重要なわけですが、ただマソラ本文と、それほど本質的な異同は今のところ発見されておりません。なお死海写本は既にCD-ROM化されていますが、検索等の仕方について、まだ改善の余地はあるようです。全般に聖書本文ないしその翻訳のデジタル化はかなり進んでおりますが、その一層有効な利用法の開発が望まれるところです。その意味で、研究項目で申しますと、A03の「情報処理」にも、イスラエル学から積極的に参加できればと考えております。

新約聖書においても、本文批評は倦むことなくなされてきましたが、同時に現在では「ナグ・ハマディ文書」、とりわけその中の「トマス福音書」等の発見により、「本文批評」の問題域が一層の拡大を見せております。

新約聖書の写本は、既に二世紀の始めから多数あり、それぞれの系統についての研究も厳密になされております。「ナグ・ハマディ文書」というのは、1945年、エジプトのナグ・ハマディで発見されたコプト語の写本ですが、特にその中の外典福音書である「トマス福音書」は、